

# 松下清雄を語る会について

今西 一

本誌への掲載の順序は逆になったが、私たちの聞き取りは、この集まりから始まった。松下清雄<sup>すがお</sup>氏の追悼をかねて、大金久展氏らが呼びかけ人になって、松下氏を偲ぶ会が、2006年6月3日、早稲田大学の完之<sup>かんしんそう</sup>荘でもたれた。会の参加者は、下記の通りである。会には、いいだもも・来栖宗孝・大金久展・柴田詔三氏をはじめ、占領下の民衆運動や日本共産党の「50年問題」などを語るのに、最良のメンバーが集まって下さった。

従って会では、松下氏の思いでをこえて、1950年前後の学生運動、共産党活動、農民運動などについて、貴重な証言を得ることができた。この記録を残すことが重要だと考えて、今回公表に踏み切った。集団の話をもとめるのは、大変な労力があるが、その難事業を実現してくださった番匠健一氏や立命館大学のスタッフ、また貴重な注を付けてくださった来栖宗孝氏には感謝したい。

日本共産党の「50年問題」や、この座談で問題になった、国際派内部の「スパイ・リンチ査問」事件などについては、拙稿「早稲田・1950年—歴史の証言—」（『立命館 言語文化研究』第20巻3号、2009年、小樽商科大学図書館のホームページのBarrelでも読める）で書いたので、それ以降の動きと、最近見つけた松下氏関係の新史料について紹介しておきたい。

## 「スパイ・リンチ査問」事件の年次

私は前掲「早稲田・1950年—歴史の証言—」のなかで、東京大学共産党細胞の国際派のなかで起った、戸塚秀夫（東大名誉教授）・不破哲三（元日本共産党議長）・高沢寅男（元社会党副委員長、故人）氏らに加えられた、「リンチ査問」事件の日付を、査問の当事者であった安東仁兵衛氏の『戦後日本共産党私記』（現代の理論社、1976年）などに従って、「1052年2月14日」としてしまった（ただし、同書の77年の4版では、「51年の春先」（149頁）と訂正されている）。ところが、法政大学の名誉教授岡田裕之氏からおハガキをいただいて、「1951年」の間違いだと指摘された。この吉田<sup>よしきよ</sup>嘉清・竹内良能氏へのインタビューへの反響は大きく、他にもいろいろな指摘をいただいているが、それは別の機会に本誌で紹介していくことにする。

言い訳ではないが、この事件は、最近のれんだいこ氏の『検証 学生運動』（社会批評社、2009年）のなかでも、「1952年2月」としている。そこでれんだいこ氏は、52年2月20日の東大内での「劇団ポポロ座」演劇発表会に警視庁本富士警察署の私服警官数名が潜入して」いたのを学生が見つけた、一部の学生が警官に暴力を加え、警察手帳を奪った、有名な「東大ポポロ事件」と同時期のものと考えて、なぜ「両事件の関わりが検証<sup>マツ</sup>されていないが不自然なことである」とまで書いている（56頁）。

しかし「戦後初期東大学生運動史年表稿」（『一・九会文集』第6集、2003年）を作った歴史

家の犬丸義一氏によって、「時間がかかったのは、例の査問事件の日付の確認であった」（88頁）として、天候まで調べて「1951年2月14日」だと確定されている。

だが、このハガキのおかげで岡田氏とお会いでき、氏の生い立ちから、当時の東大の学生運動と日本共産党の活動、「わだつみ会」のことなどを聞くことが出来た（拙稿「占領下東大の学生運動と「わだつみ会」」I・II、『商学討究』第60巻 2・3, 4号, 2009・2010年刊行予定）。また氏から力石定一氏（法政大学名誉教授）など、占領期の学生運動の重要な人物を紹介していただき、目下、オーラル・ヒストリーを続けている。その成果は順次、小樽商科大学の紀要（『商学討究』、『人文研究』、前掲のBarrelで読める）などで紹介していきたいと考えている。

また柴山健太郎氏については、安岡健一氏が意欲的な史料の発掘を行ない、柴山氏のインタビューを行なっている。柴山氏からの私信で、安岡氏の研究に協力したいという嬉しい便りをいただいている。

### 日本共産党茨城県委員会と松下・いいだ・安東

松下氏らについては、公安調査庁の公安調査資料（1959年8月1日号）の『日本共産党都道府県委員略歴簿』（東京大学経済学部図書館所蔵）という㊟文書に、その経歴が書かれている。松下忠夫氏の「兄・松下清雄 年譜と私的回想」（『立命館 言語文化研究』第20巻1号, 2008年）を補う意味でも、紹介しておきたい。

同文書によると、当時の茨城県委員会は、「水戸市裡南町372」にあり、委員長は鉢谷武夫氏である。委員は、高山慶太郎・飯田桃・山田光雄・池田峯雄・藤間敬次郎・石井健次・中島豊・井上長寿・弓削徳介・原田享一・大和田喜彦・富田正氏の12人であった。松下氏は、委員候補で、他に宮田勝喜・永井一郎氏らが委員候補であった。合計16名の県委員会であった。

「松下清雄」氏については、次のよう書かれている。

生年月日 昭和四年，八，三一

本 籍 新潟県長岡市長原町一六〇

住 所 茨城県東茨城郡茨城町羽田

学 歴 （空欄）

略 歴

昭和三〇，一二 茨城県会議員選挙に党公認で立候補（当選）

昭和三一， 四 百里基地反対闘争委員

昭和三二， 二 茨城農民同盟オルグ

昭和三二， 二， 二五 茨城農民同盟書記局細胞員

昭和三二， 九， 一〇 日農茨城県中央常任委員

昭和三三， 七， 三〇 茨城農民同盟書記局細胞責任者

昭和三三， 九， 二五 東部地区委員一第三回東部地区党会議選出  
農民部長

昭和三三， 一一， 三 茨城県委員候補一第二回茨城県党会議選出  
農民， 選挙自治体委員

松下清雄を語る会について（今西）

この史料には1955年からの松下氏の足跡が記されており、彼の農民運動と共産党の活動歴の概観を見ることが出来る。彼の盟友「飯田桃」（いいたもも）氏の方は、次のように書かれている。

生年月日 大正一五，一，一〇  
本籍 東京都港区芝三島町一八  
住所 茨城県下館市大字小川一，四三五の一  
学歴 東大経済学部卒  
略歴  
昭二六，六，八～昭二九，八  
茨城県那珂郡東海村 国立晴嵐荘入院加療  
日本患者同盟中央委員  
昭二八，七，五 北部地区委員  
昭二九，一，<sup>(ママ)</sup> 勝田細胞群委員長  
昭二九，五，一九 北部地区委員  
昭二九，一一，二六 南部地区ビュローキャップ<sup>1)</sup>  
昭三〇，四，二〇 南部地区ビュローキャップ  
昭三〇，八，一七～昭三一，三，一  
西部地区委員長  
昭三一，三，一一～昭三二，三，二九  
西部地区委員一第一回西部地区党協議会選出書記  
昭三二，二 下館市委員  
昭三二，三，二九～昭三三，九，七  
西部地区委員一第一<sup>(ニカ)</sup>回西部地区党協議会選出書記  
昭三三，一，一一 第七回党大会代議員一第一<sup>(ニカ)</sup>回茨城県党会議選出  
昭三三，九，七 西部地区委員一第三回西部地区党協議会選出委員長，  
常任委員，平和，労働部長  
昭三三，一一，三 茨城県委員一第二回茨城県党会議選出  
常任委員，青年婦人，教育文化，農民各部長，労対部，  
平和対策部員

いいた氏は、結核の療養で、長い間、日本患者同盟の活動をしていたが、むしろ1954年から南部地区ビュローキャップ、55年から西部地区委員長となり、58年には、党の常任委員から青年婦人、教育文化、農民の各部長を兼任するなど、八面六臂の活躍をしている。ちなみに茨城県委員長の針谷氏は、「明治四五，二，二六」に、「茨城県古河市大字古河」に生まれ、「法政大学専門部商科卒（昭七）」という学歴をもつ人物である。1934年8月に治安維持法違反で逮捕され、2年間の懲役を受け、36年6月から満鉄に勤務し、46年5月に中国の華北から引き揚げてきた。同年12月28日から茨城地方委員会に勤務するが、48年に関東地方委員会事務所細胞に所属し、53年8月と55年7月に茨城軍事委員長を務めている。55年8月16日からは茨城県委員会の常

任委員になり、58年に衆議院議員に立候補するが、落選している。その後も何度か選挙に出て落選しているが、なかなか興味深い人物である。

最後に、「語る会」のなかでしばしば登場する「安東仁兵衛」の経歴を見ておこう。1959年には、安東は東京都委員会の所属になっている。

生年月日 昭二，六，五  
本籍 東京都品川区五反田五の八五  
住所 東京都練馬区江古田二，一九八 島袋盛繁方  
学歴 東大法学部中退（昭二六，五，二九退学処分）  
略歴  
昭二三，八，一八 中部地区委員会（届出）  
昭二三，九，二七 東京都委員会（届出）  
昭二四，三，一七 文京区委員会（届出）  
昭二四，一〇，一五 東大細胞（届出）  
昭二七 全学連派遣農村工作隊として茨城県下で農村工作闘争に参加  
昭二七 日農茨城地区常任書記  
昭二八，五，一五 暴行，住居侵入，公務執行妨害，傷害で懲役一年一執行猶予二年（水戸地裁）  
昭二九 常東農民組合本部書記局長  
昭三一，四，二〇 文京地区常任委員  
昭三二，三，一七～昭三三，一〇，五  
東京都委員一第二回東京都党会議選出  
農民部長  
昭三三，一，一五 第七回党大会代議員一第五回文京地区党会議選出  
昭三三，一〇，五 東京都委員一第四回東京都党会議選出  
教育宣伝部長

公安側の史料という限界はあるが、元茨城農民同盟の下山虎之介氏が、私の電話に答えて「松下君や安仁は、すばらしい活動家でしたよ。彼らには、いつも公安の尾行がついていました」と言っていた意味の一端が理解できる。

なお安東氏については、前掲の『戦後日本共産党私記』（文春文庫版、1995年が、一番よく改訂されている）の他に、安東仁兵衛対談集『われらが青春』（現代の理論社、1979年）などで、思い出を語っている。

いいだも氏は、その膨大な著書の各所で思い出を語っているが、まとまった『自伝』のないことが惜まれる。周囲の人たちの協力を得て、『いいだも伝』が作られることを期待する。

## 注

- 1) ビューローとは、1951年2月の日本共産党第4回全国協議会によって作られた、非合法組織の指導部のことである。